



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

43

フォースター

天使も踏むを恐れ
ハワーズ・エンド

荒 正人訳
小 池 滋訳

中央公論社

クノー

ペケット

訳者 渡辺 一民
生田耕作
岩崎 力

Zazie dans le métro

by Raymond Queneau

Copyright 1967 in Japanese edition by
Chuokoron-sha Inc. arranged through
the Bureau des Copyrights Français.

昭和45年11月25日初版印刷

昭和45年12月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

クノ一

聖グラングラン祭

地下鉄のザジ

207

ベケット

名づけられぬもの

339

解説

512

年譜

537

聖
グ
ラ
ン
グ
ラ
ン
祭

『聖グラングラン祭』*の最初の二部は、『ピエールの面』および『ぐずついた天気』という題名で発表された。本書のなかには、それらの新たな異文が含まれているわけである。

I 魚

へビエール

妙な生活だ、魚の生活なんて……鯛^{たう}へんなものさ！
真鰻^{まうなぎ}つくりと見るとしよう……どうしてそんなふうにして生^なきられるものか、これまでわかったためしがない。
そうした形態での生命の水在は、世の涙を誘わずにはおかぬ事柄のなかでも、水ぎわだつてわたしを不安にするのである。だから水族館はわたしにとって、焼きごてをこっそり真赤に灼^やくたぐいのものなのだ。きょうの午後、わたしは「異国の都」の動物園が誇りとする水族館を見にいった。そこですっかり動揺^{どうご}してしまつて、係員に追^おい出^いされるまで動こうとしなかった。
囚^{こわ}れの身であるという条件が、そうした生活の奇妙さをさらにいっそうきわだたせている。わたしの眼をひいたのは黒い縞のあるそれらの動物の一尾だったが、非のうちどころのない規則正しきで縦横に泳ぎまわっていた。こういうやつは眠らないから、というのはすくなくともわたしの見解だが、思うにわたしがいまこうやつて書い

ているおそい時刻にも、わが縞馬くんはいいかわらずせんぜんなにもせず、あいかわらずただ縦横にかけまわっているのにちがいない。食べるためにさえ止まる必要はない。生殖するためにも同様だ。生殖というような活動も、ひじょうに没主体的な仕方ではたされるので、それに身をいれ鰻^{うなぎ}をうごかすのをやめるなどという必要はもろんないということである。

では魚はいったいなにを考えているのか？ といつたつてむろん、わたしはなにも魚にたいして、反省したり、理性的活動に専心したり、三段論法を展開したり、詭弁を論駁することなど求めているわけではない。むろんそうじゃない。だがそれにしても魚は、自分を人間世界から引きはなしている厚いガラスのかなたで起ることをはたして見たことがないのだろうか？ みんなの意見では答えは否だ。魚は考えやしない。知的活動は零にひとしい。でもそいつはひどいとわたしは思う。それじゃあ魚と人間的關係をもつことなど不可能だということとなる。もつとも漁師は、漁師だと思ふが、いろいろな逸話を聞かせてくれはする。だがそもそも、こういった人たちはわたしの「ふるさと都」ではあまり見かけない連中である。だからその逸話というものも、わたしには伝

* フランスの民間伝承で、けつしてはじまらない想像上の祭りのこと。

説か遠いところの噂話にすぎない。水族館のそとへ出れば、動物もまた生命を取りもどす。その水在にひとつの意味を賦与することもできる。魚は小川のなかを（こいつも、つまり小川というやつもへ異国の人々）のところへきて見たものだ）いったりきたりして、流れに横だおしになった草のあいだを走りぬけ、獲物をねらい、釣針の餌におびきだされる。そう、小川の魚ならまだしも理解できるかもしれない。が、海の魚となると？ 鰯は？ 鰯は？ 鰯は？ 愚劣きわまるのが鰯というやつさ。最近道に迷ったあぐく、〈異国の都〉の活動写真館で、海面すれすれに無数にかさなりあう鰯、民衆好みに鱗をすりあわせるその大群を見る機会に恵まれた。それでもともかく、一尾の鰯は一個の生物ではある。けれども鰯となると！ 鰯となると？ 眼に涙が浮かんできてしまう。父さん！ 母さん！ ほんとうにひどすぎます、群棲魚の生活は！ それについてながいこと考えようとでもすれば、それこそ頭が破裂しかねまい。いく百万といっぺんに生まれおちると、わたしたち鰯の兄弟は、いっせいに果てしない大洋を横切っていくのです、鱗を押しつけあい網という網にかかりながらも、それがわたしたち、鰯の生活なんです。それにしても、大群の真中にいる鰯はどうなるのだろうか？ いく百万という同類にかこまれたその鰯が、ある日、もっとも昼も夜もわかりはしま

いが、それでもある日、めまいにとらえられたとしよう、その真中の鰯が。そう、めまいにだ。そのとき鰯の運命は？ ああ、そいつはほんとうに悼まします！ 父さん！ 母さん！ ほんとうにひどすぎます、群棲魚の生活は。

なんともやりきれない。鱗を逆なでにされているようなもんだ。塩が歯茎を痛めつける。大洋の潮騒がその最後の泡沫を窓のしたではじいている。骨を折って外国語を勉強しているこの都会で、わたしはひとりぼっちだ。しかしそんなことをいっこうに気にしているわけではない。どうだっていいことさ。〈へふるさとの都〉はわたしに、この土地の言葉に関する該博な知識をものにするようにと〈名誉奨学金〉を支給してくれた。珍紛漢語の教師、それがわたしにもできると父の考えた唯一の職業なのである。わたしは父を失望させたくはない。わたしのためになんとか手に入れてくれたこの恩典に値するものとなってみせよう。わたしだって情もあれば恩義も心得てはいる。でもなんだって父はわたしをばかだと思いいんでいるのか？ 唐人の寝言の教師になる、そいつはいっこうにさしつかえない。頭をさげて口をつぐもう。でもなんとしても、べつの不安、生命の科学に関する不安を拭いさることができないのだ。生命！ わたしは生命

の研究に生命を捧げたい。いまここで、〈異国の都〉の四角い通りのひとつにむかっている窓辺で、わたしはそうすることを誓う。わたしは立ちあがると、腕を通りの風にさしだして口をひらいた。私は生命を云々。それからまたすわる。これですんだ。わたしの尊在もいまはひとつの意味をもつ。思うに自分の人生に意味を与えるという行為は、まだ若い場合、自己の可能性を増大せしめ、その生成を確固たるものにする、すなわち自己の運命を切りひらく、そういうことを可能にしてくれるものにはかなるまい。わたしには、自分がたどりつこうと望み、たどりつくにちがいない頂きにむかって、わたしを先導してくれる星が、のぼりつつあるような気がしている。誇りというものがあるからだ、このわたしにも。わたしの目指すのは生命の科学の頂きである。〈観光客〉としてしか、もっともその〈観光客〉だってまれなのだが、ともかく〈観光客〉としてしかわれわれの知らない、これら〈異国の人々〉の方言ごたまぜ語^{ブレイブ・ブレイブ}なんぞ糞くらえ。やつらに話しかけたってなにになろう？

きょう、また水族館にいった。鰐^{うづほ}を見る。一尾ずつ水槽におさまっている。孿猛だ。牛肉を食べる。民衆が皇帝を奉っていた時代には、ジャーナリストによれば、奴隷を食べていたという^{*}。それにしても他の魚とはひじょ

うに違って、これほどやつらを奮^ふいたさせるのはまさに孿猛さにほかなるまい。そういえば孿猛さというのは、社会における人間生活の基本的カテゴリーのひとつでもある。そこに大いなる神秘が隠されている。孿猛さがある種の魚たちをこの種属共通の生活のひどさから救っている事実は、また不安の種となる。鰐は孿猛さという唯一の力によって、自立した個性のように見えてくるのだ！

わたしにはまたべつの心痛の種がある。鰐だ。この魚の解剖学上の構造はわたしの胸をしめつける。こんなふうに、背中だか腹だかわからぬもののうえに頭をもっている、それだけであわれをもよおしてしまふ。鰐ははじめ眼だと思った。眼はからだのしたにある！そして鼻ももっている！小さな残忍な口も。このおそろしかたちを理解したとき、苦痛のあまり涙がもうすこしでこぼれ落ちるところだった。そしてその姿は、あたかもそれが翼でもあるかのように鰭を動かすと、突如、なにか海鳥のようなもの、大きな羽毛におおわれた信天翁^{信天翁}の水にうつったイメージとかわり、水面めざして飛び去ったのである。いや、どう考えたって、そいつはありえないことだ、鰐のような存在なんて。こんなぐあいに眼がついて水のなかを飛び、それでいてなんにもしないな

* 古代ローマでは、貴族は鰐のえさとして奴隷をあたえたという。

んで。どうしたってありえぬことだ。

以上がきょうの体験である。わたしは生物のあまりにも低い次元からはじめてしまったらしい。深淵はなんとも底しれぬものだ。猿の生活、そいつは承認できる。牛のだって結構だ。鳥のだってそれなりにいいだろう。だがあした動物たちすべてのなかでどうしても理解できないのは、それらがなにひとつ関心をもたず、ましてや心を労することも無いという事実だ。が、もういい、もういい。けさ、二通の手紙を受けとった。ひとつは父から、もうひとつはボールから。父はこう書いてきた。「わが都は〈祭り〉の準備に忙しい。おまえが参加できないのは残念だ。何十年來これ以上みごとなものはないと言われるにちがいない。わしは富と榮譽を寄進しかなりの犠牲をはらうこととなろう。

おまえが一心に学問し、かなり苦勞して手にいれてやったあの〈名誉奨学金〉に価する人間になってくれるようわしは期待している。さいわい、羨望の的だったあのようの特典をおまえに受けさせることができたからには、人には敬われる前例のない輝かしい地位、〈ふるさとの都〉の通辞通弁案内官がおまえには約束されている。すばらしいことではないか？ なんとという未來だ、坊主！ おまえはどれほどわしに感謝しなければならぬことだろう！ わしがいなかったらおまえはどうなっている？

わしのためにおまえはどれだけお返しをしなければならぬことだろうか？ わしの名に恥じぬものとなるんだ。勉強しなければいけない」

まあよからう。弟のはこうだ。「送ってくれた二輪移動装置ありがとう。いまでは乗りこなせるようになった。もっとも、それで人々をおどろかせてしまったけれど、これはぼくの本意ではない。ことしの〈祭り〉はその華やかさでこれまでのどの〈祭り〉をも凌駕するだろうと世間ではもっぱらの評判だ。兄さんがいないのは残念至極。でもいちばん興味ぶかいことはそんなことではない。ジャンが不思議な発見をしたことだ。彼はまったくもって奇妙な足跡を追っている。ぼくたちもうすこしわかったら、そのおどろくべきニュースを兄さんに知らせようと思っている。二輪車はとっても役に立っている」発見は発見である。足跡は発見ではない。弟たちとききたら？ いや、子供なのさ。

わたしはこの〈異国の都〉で、土地の人とはなんの接触もなく、まったくの異邦人として暮らしている。わたしの知っているのはほとんど〈下宿屋のおかみ〉と〈先生〉と〈管理人〉だけにすぎぬ。住民たちとは、共通の交通機関の利用から生まれる、無数のごくありふれたつながりさえもない。それというのも、出かけるのはもっ

ばら二輪回転移動装置によっているからである。わたしの自転車は、おかみが見張っている場所から先生の教える場所へ、そこからのおおくの場合、管理人の治める場所へとわたしを運んでいく。〈異国の都〉を横切り走っていくあいだの、通りにひしめくおびたらしい群衆との関係はといえば、わずかにわけのわからぬバスの運転手の罵声と交通違反に眼を光らせている都市防衛軍の警邏係のお小言だけにすぎぬ。だから唯一の実在する関係は、わたしが自分のために自分でつくりあげた関係ということになるだろう。先取りして言う、現実のそうした関係のうち女性関係はまったくくない。童貞であること、それは思想を強固なものとするために欠かせないことだとわたしは思っている。聞くところによれば、ある「異国の人」が林檎落下の法則を構想したというのも、そのようにしてだったという。わたしは未来の栄光のために頭脳にのぼってくるものを精液として失ってはならないのだ。わたしの生命は生命に捧げられている、そのことはもう誓った。生命、わたしはいま海老の場合について、それを観察している。ところがそいつはぞっとするようなしるものだ。そのことはやつも、つまり海老も、自分で気づいてはいるらしい。すくなくともそう考えてみたことはなる。わたしは父に海老の生命について考えていることを書き送ったところだ。それについて父はべつにな

にも意見はないと思う。それでもなんとかして、わたしの思想の進歩を父にわかってもらいたいのだ。

最初のうちは、魚の生活と甲殻類の生活にはほとんど差異がないように思えるものだ。おととい、わたしは一匹の海老が鰓と平目の真中を散歩しているのを目にした。見たところいずれもおなじ世界に属しているようだった。けれどもよく考えてみれば、この連中のあいだにもおおくの相違のあることに気づかされる。海老は魚とはべつものなのだ！ 結局のところ平目だって人間からそれほど隔たっているわけではない。いまではわたしもそう思っている。だが海老となると！ 殻をかぶって生きること、いいかえれば身のまわりに骨をもつこと、それは生活を理解するその仕方において、どれほどの根本的变化をもたらずにはおかぬものだろう！ たえず海全体を身のまわりに感じ、はさみをうごかし、他の動物が通りすぎるのを見、獲物をうかがう、むろん、海老についての考察の序論はここからはじまるわけだ。

といっても魚について、その生活のみじめさ、個性を奪われたその水在の無意味さを認める点で、わたしにんの変化もない。ただだからといって、そのために海老の鬼在に心を痛めずにすむわけではない。そもそも、これが生命というものであろうか？ ああ沈黙、あの影、あの海藻、あのはさみのさきの一種の瘳猛さ、あの欲で

はりつめた甲冑？ 暗黒のなかの海老を思い浮かべながら生命について考えねばならないのである。それに、台所の鍋のなかでやけどしながら果てるのでなければ、いったいやつらはどうやって死ぬのだろうか？ 老衰して逝くのか、海老は？ ゆっくりと「立ち去るのか」、それともリニューマチで動けなくなり、表面に小さな環状動物の寄生したはさみで、死と闘いつづけるのか？ 自己の亡死について考えたことがあるのだろうか、海老は？ たとえば腹と白い翼のうえに眼のついた鱧であればよかったと思わぬだろうか？ 仲間の椰子蟹、あの足の速いぎざぎざでおおわれた動物のように、木にのぼって果実をむさばり食うことができたらと思わぬだろうか？ もっともわたしがある動物はこれこれだと言うとき、べつに主観的判断を押しつけようとしているわけではない。人間の判断さえも控えている。ただその蹲在の意味そのものを規定しようとしているだけのことだ。

へふるさとの都から手紙がこない。わたしは辛抱づくく勉強をつづけている。夕暮帰途につくころ、街はすっかり色を失って見える。わたしは父のこと、母のこと、弟たちのことを考えた。それから、先日動物園で見たチータのことも。こいつも奇妙に見えるかもしれない。だがそれは騎士のカテゴリにはいるものだ。それにして

もチータから海老へ、なんという飛躍だろう。海老も甲冑に身をかためているとはいえ。

一人の人間と一匹のチータだけがこの世に残ったところを想像してみる。気位たかい自由な仲間となつて、どちらも地表を闊歩するだろう。きっとそうなるにちがいない。こんどは一人の人間と一匹の海老だけがなにか破局のようなものあとまで生きのびたと仮定しよう。焙が地平をおおっている。疲れはてた人間は、ぼろぼろの靴も、ほころびた靴下も、脱ぎすててしまった。そしてしばしの憩^{やすみ}らぎをもとめて血だらけの足を海にひたす。ところがそこに海老がやってきて人間の足の親指を切ってしまう。もう叫ぶ習慣もなくしてしまった人間は、水の面に身をかがめ海老にむかって言う。「おれたちだけが荒廃したこの地上の生物なのだ、海老くん！ 宇宙のたった二個の生きものであり、二人だけがすべてをおおう天災に立ちむかうことができるのだ。手をつながないかね、海老くん？」しかし尊大な動物は人間に殻をむけると、べつの大洋目指して去っていく。海老がなにを思っているのかわかるだろうか？ それに海老の不可解な憎在について、どう考えたらいいのだろうか？ 頑迷固陋で泰然自若とした海老のイメージは、その理解しがたいはさみで、人間の天空をも突きやぶっていく。わたしには夜霧につつまれた屋根のうえに、とつぜんその二本の

肢が威嚇するように立ちほだかり、巨大なやつとこをあけたりとじたりしながら、星座を切りわけていくのが開いた窓から見えるような気がする。

《異国の言葉》に関しては、ほとんどなんの進歩も見られない。先生もあらかじめ忠告してくれたし、わたし自身にもよくわかっていいるのだが、けっきょく以前より外国語がそうできるようなもならず、あるいはまえより駄目になって、へふるさとの都に帰ることとなるだろう。でもそうになったら、父や父を含めた町全体がいたいなと言おうだろうか？ ベつのもっとすばらしいおみやげがないとしたら、そのことはわたしに不安の種となるにちがいない。

動物の生命とは不滅の幸福そのものなのであろうか？ わたしはまた水族館に平目と鯛を見にいった。やつらを公平に客観的に観察したのだ。どうしても魚がとくに幸福だとは思えない。そうした印象をあたえてはくれないのである。これもまた、こういった海棲動物の生命には適用できぬカテゴリーだ。やつらは幸福にあずかっていない。とすると不幸には？ 穴子も、鰈も、平目も、わたしにたいして答えることができなかった。それ以上ながいことやつらに注意をこらしても仕方がないので、わたしはそれまで知らなかった、熱帯魚の避難所となっ

ている一郭のほうへと進んでいった。そこには北半球産、南半球産、それから鰻の海からきたものたちがいた。羽をむしられたものの、髭をはやしたものの、犬の面をしたものとかなにか欠けたからだをしたものとかがいる。ぜんぜん透明なミリメートル単位のやつが気の狂いそうな速さで移動していく。もうすこし大きいのは、縞模様とか斑点とか色彩でさまざまにからだを飾りたてている。これらの小さな魚たちは、それまでのものとおなじように困惑させはするが、新しい探究へとわたしの全精神を方向づけはじめなのだ。ともかくこの豆粒のようなやつらは、世界についてのいささかなりとも一貫したヴィジョンなどまず持ちあわせてもいないくせに、そのときわたしの想像していたものにたいして、すくなくともある意味では、陽気さのあらゆる徴候を示すことによって答えたのである。やつらの理由もない不意の急転回、いかなる秩序もまたぬどのような体系の観点に立ったとしても正当化しえない、やつらの水のなかに描く稲妻模様、その中断された軌跡の偶然、そういったものは、思うに熱帯のものでしかありえぬある種のよろこびをあらわしているようにわたしには見えた。

このようにしてこれらの小動物の動きのうちにいささかの人間味を発見しえたこと、わたしの真意をあきらかにするためほとんどおなじだが違った表現を使えば、人

間のもつ生命のイメージに呼応するまことの生命力を発見しえたことは、水族館を訪れるたびに抱かされてきた心痛を、いさかなりともやわらげてくれるものにほかならなかった。だがそのとき、出口からほど遠からぬところですかに光をうけている、眠ったようなガラス箱にわたしは眼をとめた。そこになにがあるか知らなかった。そこで近づいていったのだ。

ある意味で、そこにいったのはいいことだったかもしれない。生命の科学のためには。だがそれにしても、これほど厭うべき光景はまったく見ないでもよかったのだ。ぼつんとはなれた容器には数匹の白い虫が容れてあった（容れてあったのだ！）。ひじょうに正確に言えば穴居魚が。太陽からはなれているためだろう、眼を失っていた。あらゆる色を忘れ、鱗はもはやあるかなきかの虫様突起にすぎない。海底の沈黙や暗黒は、それでも燐光やこだま程度のものは許していた。けれども真水のよどむ地下の洞窟では、まったくの沈黙であり鉱物質の暗黒なのだ。生きることもくらはできるのだろう、そこでだって。現に生物がいる。だがそれはどういいう生物なのか？ 魚の名前を要求するこの白っぽい幼虫。説明書によると、祖先は光の愛撫するすべてのものとおなじように色もあって、生き生きした眼と敏捷な鱗を持っていたという。ところが闇の習慣がやつらを変え、こうなってしまった

のである。それでも生きている！ それでも生きているのだ！ そこに生命の力と柔軟さと永續性の証しを見る人もいるかもしれない。だがわたしは、水棲穴居動物を目のあたりにして、やつらの送っているひどい生活をもとむずかしい。暗黒のなかで盲目なものが、生まれ、耐え、おそらくはくたばるところなど。しかも生殖までおこなうのだ。なんという悲痛な神秘だろう、これほど悲惨な状態にあつてなお生存しようとするその執念は。そうだ、悲惨だ、じつに悲惨だ！ それでもまだしもやつらが……考えるとは言うまい、それでもまだしもやつらが……意識というわけにもいかない……そう、まだしもやつらが自己をこえていく仕方を心得ていたら？ そうだ、まさしくそれなのだ、自己をこえていく仕方だ。その点で人間の生命と似たものはなにもないのだ。だからこそまったく非人間的で解釈もしえぬものなのだろうとまれ、あるいはそのことのうちに、盲目で暗黒のなかを、こうして生きるこの意味があるのかもしれない。盲目で……暗黒のなかを……わたしはすっかり涙にくれた。

母が手紙をくれた。ジャンは長途（乾きの丘）へ、つまりかつてだれも挑んだことのない、あの起伏のはげし

峻嶒な山脈へ遠征に出かけたという。なん日も帰ってこないところを見ると、きっと「化石の泉」か、さらにあの山脈でもいちばん高い「大鉱山」まで、足をのぼしているらしい。それが母を不安にしている。もう帰ってこないのではないかと心配している。それでも父は弟について、ぜんぜん非難めいたことは言わないようだ。わたしにたいしては、勉強して授けられた大きな名誉に値するものとなってくれと記してある。わたしとていかにもそうなりたいと願ってはいる。けれどもこの外国語というやつは、ほとんどわたしに向くようにはできていない。まったく進歩しないのだ。先生も小言をいっては嘆き悲しむ。わたしの無能の噂はすでにへふるさとの都にまでとどいているのだろうか？ あのお人好しが手紙でも出してはいしまいか？ とときどき、下宿屋のおかみがスパイではないかと想像もしてみる。ああ、どうしたらわたしは、「異国の人々」が思想と信じこんでいるものを表現するのに使う、このへんてこな言葉の固定観念から解放されるのだろうか？ しかも「観光客」となったこの「異国の人々」とまた出会い、やつらのばかな質問や愚にもつかぬ興味や気違いじみた好奇心とつきあうなんて。おまけに連中の極端方言のまるっこい語を睡で泡だてながら話すことになるんだ！ ちえっ！ いやだ、いやだ！ とつぜん、わたしは思い出した。どうして思

い出したのだろうか、あの冬のある日のことを？ 風が窓のそとでざわめいていた。わたしはひとり部屋のなかで「春の競技」の練習をしていた。十一歳だったと思う。もう夜だった。ふいに父がはいってくると、しばらくわたしを見つめていたが、その眼はまるで石のように思われた。それから一言もいわずにそっと扉を閉めて出ていった。わたしは練習をやめ考えこんだ。そして理解したのだ。やがてわたしは……沈黙。それは幸福な一瞬の思い出ではない。不安な印象、異様な出来事の前兆だったのである。

へふるさとの都へ帰ると、父や父を含めて市民たちは、まずわたしを手きびしく批判するのではないかと思う。伝統保護委員のル・ビュゾクをのぞけば、市民のうちではほとんどわかるものはいないはずだが、それでもわたしの外国語の知識はおそらく不十分なものと彼らの眼に映るだろう。しかしこの点に関して世論などというものに心を乱されることもあるまい。わたしには彼らに贈るべつのおみやげ、深奥の場所で手に入れた宝物があるからだ。それを発見するためにこそ、わたしははるか秘められた洞窟にまで身を挺し、海老と親しみ、大洋のおびただしい鰯とかかわりあったのにはかならず。生命についてわたしの冥想、それこそわたしが彼らに差しだすものであり、そうしたとき、そのときはじめて、へふる

さとの都」はわたしにたいしておこなったものろのこ
とを誇りと思うことができるであらう。

わたしが研究目的を達成するのは、人間の理解してい
るような生命をわたし自身失うときだ。その目的は、刺
すような痛みをとまなうまったく純粋な仕方、穴居魚
という外観をとって提示されているのにはかならない。

きょう、わたしはまた穴居魚を見にいった。やつらが自
己をこえることができるとした場合のことを考えたから
である。だがそのような超我とはなんと非人間的なもの
であらう！ それにいったいそのようなことが可能であ
らうか？ わたしはやつらを観察した。やつらを容れて
ある（容れてあるのだ！）容器はとくに大きいわけでは
なかった。水面に取りつけられたあかりが照らしていた
が、それらも必要とされるだけのかすかなものだった。水
もおなじように、必要とされるだけよんでいる。やつ
らはそこにいた、四匹、それ以上ではない。おそらくほ
かのやつは徹底的に光から身をかくしているのにちがひ
ない。たいしたことをするわけでもない。ほとんどずつ
と、身動きもしないでじっとしている。「自分から」動
きだしても、それこそなにか白っぽい流れ、かるく砂に
触れ数「歩」さきでまた動かなくなる蒼ざめたふくらみ
としか見えはしない。わたしには不思議だ、いったいい
つ、何を食べているのだらう？ そう、何をやつらは食

べているのか？ そういえば海老はどうだったろう、食
べものは？ 魚だったと思う。人間も鮮魚を食膳にのぼ
らせる以上、そのことはなお海老の世界にはいりこむ
余地があるという幻想をあたえかねぬ。けれどもこの鉛
色の存在は？ 何を食べているのだらうか？ 自分たち
とおなじように、あらゆる色を失った草の葉だらうか？
あるいは食べないのだらうか？ もしくは口にするもの
ではないなにかを食べているのだらうか？

わずか一月ばかりまえわたしの興味をひいた事柄も、
いまではまったくどうでもよいのだ。わたしの活動の意
味は生命そのものにこそあるのであって、それについて
野蕃な方言で奇天烈な翻訳をしようなどというのではな
い。わたしの知性全体の目指しているものこそ生命の理
解にはかならない。そしてさらにすばらしいのは、こう
した情熱的な研究から、ただちに、動物の生命の理解し
えぬこと、その非人間性が、遂に確認されることであろ
う。そもそも海老とか穴居魚とかいうものの生命の意味
が完全に人間精神によるあらゆる支配を逃れるものとす
れば、つらなりあった一連の概念、むしろひとつの体系
とまでいいたいが、そういったもののうちに、いったい
どうやって宇宙をはいりこませることができるとい
うのか？ このような生命をそれによって判別しうるカテ
ゴリーとは、わずかに「恐怖」と「沈黙」と「闇」にすぎ